＜教育報告＞

エイズ・ピア・エデュケーション事業の効果的な推進のために

平成 15 年度　合同臨地訓練　第 4 チーム

十亀亜也香，村井やす子，伊藤和美，帖地美奈子，加藤華奈子，井坂健二

Promotion of an HIV/AIDS Peer Education Program

Ayaka SOGAME, Yasuko MURAI, Kazumi ITO, Minako JOCHI, Kanako KATO, Kenji ISAKA

Ⅰ　はじめに

平成 14（2002）年に「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（感染症法）」に基づき東京都に報告されたエイズ患者・HIV 感染者注）の報告数の合計は，368 人となっている．HIV 感染者報告数は過去最多であり，都内保健所等で実施される抗体検査で判明する陽性者数，陽性率は共に増加傾向にある [1]．しかし，都民のエイズに対する関心は急速に薄れつつあるのが現状である [2)3)]．

そこで東京都では，HIV 感染拡大を防止し，偏見のない社会づくりを推進する活動の一環として，平成 13(2001)年度より「エイズ・ピア・エデュケーション事業」を開始した．この事業は，HIV 感染者に対する偏見差別のない社会づくりと感染拡大の防止を目指して，同年代の仲間同士（ピア）が一緒にエイズのことを考える技法「ピア・エデュケーション」を用いた青少年に対する普及啓発活動を実施することを目的としている [4]．

Ⅱ　地域の概要

合同臨地訓練のフィールドは，武蔵野市，三鷹市，府中市，調布市，小金井市，狛江市の 6 市からなる東京都北多摩南部二次保健医療圏である．協力機関は，東京都府中小金井保健所，三鷹武蔵野保健所，狛江調布保健所である．

Ⅲ　目的設定までの経緯

合同臨地訓練実施にあたり，フィールドである保健所から出された要望をもとに，グループで話しあった結果，当初の目的を以下の 2 つとした．

① 学校関係者にピア・エデュケーションの必要性を理解してもらえるような媒体を作成し，報告会を実施する．

② 学校管理者の性教育に関する意識・現状の把握を目的とした調査をおこなう．

学校管理者へのアンケートを実施する理由としては，保健所が学校と連携する際には学校管理者の理解が必要であること，学校管理者が性教育に関して担当者と話し合うことよって性教育に対する意識を高める機会にしたいという保健所の意向があったからである．

目的を決定した後，まず，ピア・エデュケーションの必要性を学校管理者に的確に説明するための流れを考え，ブレーンストーミングによってカテゴリーを抽出し，そのカテゴリーを象徴するいくつかのキーワードを元にし，文献検索をおこなった．

そして，質問票作成にあたり，その内容を再度ブレーンストーミングで抽出し，学校の現状として「授業・知識・意識・学校の諸問題・PTA・性行動・マスメディア」，展望として「授業内容・ネットワーク化・マスメディア」の項目をあげ，これらに沿って質問票素案を作成し，保健所がその内容を確認するという作業を繰り返しおこなった．

ところが，都議会の中で学校での性教育のあり方が問題となり，学校が性教育に対して敏感にならざるを得ない状況となった．そのため，今年度は学校管理者に対する調査の実施が不可能となり，今後の方向性についての再検討を余儀なくされた．

Ⅳ　目的

前述の経過から，新たな目的設定のための検討を行った．その結果，今後，東京都の保健所などの現場で実際に活用されるような質の高い質問票を作るため，学校関係者にプレテストを実施し，これまで作成してきた質問票を改善することとした．

また，プレテストを実施するだけではなく，保健所が実施するピア・エデュケーション事業に若者が集まりにくい現状があることが考えられたため，若者から，事業継続の要因を聴取してまとめることとした．

指導教官：西田茂樹（人材育成部）
加藤則子（生涯保健部）
橘とも子（人材育成部）

そして，これを「APE-C（Aids Peer Education-Continuation）プロジェクト」と称し，8 月に三鷹武蔵野保健所で開催されたピア・エデュケーション学習会に参加した看護系学生に対して，KJ 法を用いてグループワークを実施し，若者の事業参加要因を抽出することにした．また，保健従事者により近い立場である平均年齢 29 歳の私たちのグループ（6 人中 3 名保健師）も同一条件でグループワークをおこない，看護系学生グループの結果と比較して相違点があるか確認することをおこなった．これにより，事業企画段階において考慮すべき点がより明確になると考えた．

上記のように今後の方向性について再検討した結果，以下の 2 つを新たな目的とした．

① 今後東京都の調査に使用できるよう，プレテストを実施し，作成中の質問票を完成させる．

② 今後のピア・エデュケーション事業展開のために，ピア・エデュケーション継続の要因を探る「APE-C プロジェクト」を実施する．

Ⅴ　プレテスト

1. 実施方法

関東近県の中学･高校に勤務する学校管理者または勤務年数 15 年以上の教諭のうち，協力の得られた者を対象に，質問紙自記式回答を依頼郵送回収した．

プレテスト実施の際には，質問票の作成過程において私たちや保健所との間で議論になった点については，併せて意見を求めた．

2. 結果

27 名の協力が得られ，うち 20 名からの回答があった（回収率 74.1%）．その結果，質問票に使用された用語で「体験学習」「性教育」「カリキュラム」の意味や定義に関する意見が多かった．

「貴校において過去 1 年間に，妊娠・出産・中絶した生徒はいますか？」，「貴校において過去 1 年間に，性感染症に感染した生徒はいますか？」の質問文については，「このままで特に問題はない」と「答えづらいので，変更したほうがよい」に意見が分かれた．

「『自分の携帯電話に知らない人からメールがきた場合にどう対処するかを考えさせる』というような授業をおこなっている学校があるとの報道があります．性に限らずいろいろな場面で多くの情報から正しいものを選択する必要性があるといわれています．貴校では生徒に情報選択の重要性を意識させる授業をおこなっていますか？」については，「性教育の内容から離れている」「質問の意図がわからない」といった戸惑いが感じられた．反面，「授業という形ではなく，その都度話をしている」「生きる力を養う上で判断力を培うことが重要視されており，質問としては的を得ている」という肯定的な意見もあった．

全体的な意見や感想としては，「学校管理者としては答えにくい」「アンケートを実施する時期は考慮した方がよい」「将来を担う児童・生徒の現状を見ると，大変心配している」「ぜひ，積極的な学校現場との連携を望みます」といった様々な意見を得ることができた．

3. 考察

プレテストの結果から，学校管理者を対象に性教育に関する意識・現状把握のための調査を行う意義と今回作成した質問票の改善点が明らかになった．

対象者を学校管理者にする意義については，「学校管理者がその質問票の内容に関して，どの程度熟知しているか疑問の余地がある」との意見があったが，「性教育の担当ではなかったので，担当の先生や教頭先生に聞きながら質問票に答えた」という意見もあり，学校管理者が担当者と話し合いながら回答することで，性教育に対する意識を高める機会にしたいという保健所の意向に沿うと思われる．

質問票については以下の改善点があげられ，修正をおこなった．

特に意見が出された「体験学習」「カリキュラム」の 2 語については，用語の定義が曖昧であり，どのような内容を指すか明確でないため削除した．

妊娠・出産・中絶，性感染症罹患の生徒の有無を問う質問については，回答のしやすさを配慮するために，「貴校において過去 1 年間に，妊娠・出産・中絶についての相談・助言をされた教職員はいますか？」「貴校において過去 1 年間に，性感染症についての相談・助言をされた教職員はいますか？」という質問文を加えた．

情報選択の必要性を教える授業についての質問は，「現代社会において，情報を皆無にすることは不可能である」という状況から，学校が情報に対してどう認識しているかを知ることを目的としていた．私たちとしては，教諭個人のレベルではなく学校としての姿勢を確認するために，「授業」としての取り組みが重要であると考え，質問文中の「授業」を強調することとした．

プレテストの実施を通じ，学校関係者と保健従事者の性教育のとらえかたに違いがあることも明らかになった．したがって保健所が学校と連携するためには，性に対する学校関係者の認識をより理解することが必要であると思われる．

Ⅵ　APE-C プロジェクト

1. 実施方法

「APE-C プロジェクト」は，前述のピア・エデュケーション学習会に参加した看護系学生を中心とした 3 つの集団（計 14 名）に対し，抽出する要因をそれぞれ以下のように設定し，KJ 法を実施した．

① ピア・エデュケーター養成事業に参加する要因

② ピア・エデュケーター養成事業に参加した人が実際にピア・エデュケーションを実施する要因

③ ピア・エデュケーションを実施した人が継続して活動に関わっていくための要因

2. 結果

若者がピア・エデュケーター養成事業に参加する要因としては，学生のグループ，私たち合同臨地訓練グループの両グループで場所やプログラム内容の質，正確で適切な事前情報が得られることなどは共通した．一方，私たちのグループは「社会的認知度の向上」「学校の理解」などが必要だと感じたのに対し，学生のグループは「個人的な時間や事情」「モチベーション」などが必要だと感じており，社会認知度などの大きな環境整備よりも個人レベルの問題に合致することが重要だという点で大きな違いが見られた．

ピア・エデュケーター養成事業に参加した人が実際にエデュケーションを実施するための要因としては，時間や場所，仲間がいること，学習会の内容が充実していることなどが共通したが，私たちのグループは，「教育への興味」「社会的ニーズ」「アドバイザーの存在」などエデュケーションを実行するための条件を中心に必要性を感じていた．それに対し，学生のグループは「学習会のプログラム内容」「参加者が多様であること」など，学びや楽しさ，仲間との出会いを盛り込んだ学習会の内容や質を重要視していた．

ピア・エデュケーションに参加した人が，継続して活動に関わっていくための要因としては，サポート・マネジメント体制や仲間づくりの場であること，実施した際の生徒の反応といったことは共通した．一方，私たちのグループは，「責任感・自覚が芽生えること」「組織化されていくこと」など他者のために行動できる環境作りが重要だと感じたのに対し，学生のグループは「準備・作成の過程が楽しいこと」「メンバー同士の仲間意識が高まること」「自由度が高いこと」などのように，個人的な満足につながることや，自分たちの性に対する意識が高まることが継続するために必要な要因だと感じていた．

3. 考察

今回，ピア・エデュケーターとして行政が期待する年代である現役の学生と，保健所勤務経験者 3 名を含む平均年齢 29 歳の私たちのグループとの間で，事業参加を促進する要因について重要視している事項に差が見られた．

両者が同じように大切だと思っていることは，事業の体制や質の充実，開催場所などの行きやすさなどである．しかし，私たちのグループが社会環境整備や認知度などを事業参加促進の要因として上げていたのとは異なり，学生は，どのグループも興味や自己成長の認識，作業過程の楽しさ，雰囲気など，個人的な感覚や充実感を重要視していることがわかった．

今回の対象者は全員が看護系学生であり，一般の若者に比べて，疾病や衛生教育について学びや関心がある特殊な集団であると言える．このような集団でさえも，保健従事者により近い立場である私たちのグループとは発想や感覚に大きな違いがあった．

今後，若者への普及啓蒙を目的としてエイズ・ピア・エデュケーション事業を効果的に展開していくためには，以下の 3 点に留意して事業企画をする必要があるといえる．

① 学生の負担の多い企画は，内容が良くても参加しづらい．特に，初めて顔を合わせる場となる学習会の開催時間・場所・回数は，特に参加者の負担を少なくする工夫をする．

② 必要な知識を伝えるだけでなく，参加者が毎回，充実感や満足感，次回への期待感等を得られるプログラム内容にする．

③ 学習会参加からピア・エデュケーターとしての活動までのプロセスを，適切かつ継続的に示す．

Ⅶ おわりに

性教育を充実させることについて意義を唱える人もいるという報道もある[5]が，若者が正しい情報を知る権利や責任をもって情報を選択する権利を有していることは，世界的にも認められている[6)7)]．そのような権利を尊重し，性教育の充実を図っていくことが大人の責務であろう．

今後，保健所と学校が密接に連携をとり，若者の考え方や行動に理解・配慮したピア・エデュケーション手法を用いたエイズ予防に対する普及啓発活動が，東京都のみならず全国に広まっていくことを期待する．

引用文献

1) 健康局医療サービス部感染症対策課. 平成 14 年　東京都の AIDS 患者・HIV 感染者の動向と検査・相談事業の実績．2003-3
2) WEB 広報東京都．東京都．2003-11
3) 平成 14 年度東京都エイズ対策事業実施計画．東京都衛生局．2002-4
4) 東京都エイズ・ピア・エデュケーション事業実施要綱．2003
5) 本田雅和. 世界人口白書に見る若者の姿　性教育の充実こそ急務．朝日新聞．2003-11-03
6)「子供の権利条約」．UNICEF
7) UNFPA（国連人口活動基金）白書